眼で見る世界の森林（14）

過度の森林利用の終着駅―プロソピス低木林（Terminus by Excessive Forest Use - *Prosopis* Scrub）

ボリビア南部のタリハ市はアンデス山地の東斜面中腹の海抜高約1,850 m に位置し，温和な地中海性気候となっている。ただし，年降水量は非常に少なく614 mm，5 月から8 月は降水量がほぼゼロで，非常に乾燥している。場所によっては49 mm と沙漠と同様の降水量となっている。タリハ盆地の森林について，田畑（1999，熱帯林業 No. 46）による紹介を引用させて頂こう。タリハはポトシなどの鉱山への食料および坑木の供給地として重要であったため，早くから開拓が進められたと推測している。タリハに着任したフランシスコ会派の Mingo 神父は 1794 年に，「Tipa（*Tipuana tipu*），Quebracho（*Aspidosperma quebracho-blanco, Schinopsis* spp.），Cedro（*Cedrela* spp.），Pino del Cerro（*Podcarpus parltorei*），Nogal（*Juglans boliviana*），Ceibo（*Erythrina crista-galli*），Tarco（*Jacaranda* spp.），Sauce（*Salix* spp.），Molle（*Schinus molle*），Churqui（*Acacia caven*）の深い森が見えた」と書き残している。それから 90 年後の 1884 年には Corrado 神父が，「乾いた土，深い崖，刺の茂み・・・わずかに自然の豊かさを見せるのは Churqui と Algarrobo（*Prosopis* spp.）と Molle である」と記している。18 世紀末は，タリハはまだ“Valles Secos Interandinos（アンデス山間地乾燥谷植生：海抜高500 m から 3,300 m，年降水量 500 mm から 600 mm の範囲に成立する植生で乾燥林，chaparral〔硬葉低木林〕，matorral〔トゲ潅木林〕，浸食された土地が混在する）”に区分される森林で覆われていたと想像されるが，19 世紀末にはわずかにアカシアやプロソピスの低木疎林が残されているのみとなってしまった。これらの低木疎林は乾燥や貧栄養に耐性があることから地力が極端に衰えたことをもの語っている。それからさらに 100 年が過ぎ，プロジェクト・サイトは石れきが露出する山肌にアカシアやプロソピスの低木が点在するのみで，それさえもヤギがよじ登って葉を喰い，住民は枝を燃料としている。写真は谷の一部で回復過程にあった *Prosopis nigra* の低木疎林である。谷間で比較的水条件がよく，養分も溜まることから回復がやや早いのであろう。大きい個体で樹高約 3 m，面積は狭い。衰退をしながらも，200 年以上も過度の利用に耐えてきた林分である。

谷間の一部で回復しつつある *Prosopis nigra* の低木疎林　1999　Oct.

斉藤昌宏（森林総合研究所 REDD 研究開発センター）

本欄に読者の皆様の投稿を歓迎します。詳細は 87 号 30 頁を参照ください。